九州大学学術情報リポジトリ

QIR 九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Title	中国語母語話者と韓国語母語話者は条件文「ト」をどのように理解しているか
Author(s)	斉藤, 信浩; 玉岡, 賀津雄; 毋, 育新
Citation	九州大学留学生センター紀要 ‖ 20 ‖ p1-9
Issue Date	2013-02-22
URL	http://hdl.handle.net/2324/25956
Right	

This document is downloaded at: 2013-09-24T06:19:01Z

Kyushu University Institutional Repository (QIR)

中国語母語話者と韓国語母語話者は条件文「ト」をどのように理解しているか
How do native Chinese and Korean speakers understand conditional '*to*'？

斉藤信浩 (九州大学留学生センター, nsaito88@isc.kyushu-u.ac.jp)
玉岡賀津雄 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科, ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp)
毋育新 (西安外国語大学東語学院, nakare72@yahoo.co.jp)

キーワード： 条件文「ト」の習得, 中国語母語話者, 韓国語母語話者, 重回帰分析

1. はじめに ―事実的領域と仮定的領域の連続性―

人間の論理把握は条件文を中心としたネットワークによって形成されており(坂原, 1985; 小泉, 1987), 「暗黙の前提」の成立・不成立によって，条件文は理由文にも逆接(逆理由文，逆条件文)にもなりうることが指摘されている(坂原, 1985; 小泉, 1987; 前田, 1991, 2009) (注1)。即ち，我々人間の論理把握の能力は，条件文か原因・理由文(以下，理由文)かといった単純な二項対立にはなり得ず，論理文は仮定的領域(条件文)から事実的領域(理由文)へと展開するという連続性があると考えられる(注2)。

表１ 論理文の意味領域の連続性

	接続	
領域	順接	逆説
仮定的領域	条件文	逆条件文
事実的領域	理由文	逆理由文

注: 前田 (1991, 2009)より作成.

日本語の「ト」「バ」「タラ」「ナラ」は条件文を構成する接続助詞である。その意味領域は仮定的領域に属している。しかし，これら４つの条件文の仮定性・事実性の度合いはそれぞれに差があり，「ナラ」が現実に反する最も仮定的な描写である反事実的条件文を表すことができ，仮定的な特徴を強く有する一方で，「ト」は事実的な用法に近い表現であり，仮定的な用法よりも事実的な用法で用いられることが多い。

前田(2009)では，これら条件文の４つの文型を「条件的用法」と「非条件的用法」に大別し，条件的用法を更に「仮定的」と「非仮定的」に下位分類している。非仮定的な用法とは，前件と後件に仮説的 (注3)な要素がなく，事実的な要素が前件と後件に結合した複文であり，条件文のプロトタイプ的な用法ではないものをいう。「ト」は確かに仮定的な用法よりも非仮定的な用法で用いられることが多く，「ソファーに腰掛けると，眠くなった(連続)」「娘が進学で東京に出ると，朝食を作らなくなった(きっかけ)」「窓の外に目をやると，妹が歩いているのが見えた(発見)」などのように，「前件：事実」「後件：事実」の組み合わせで，事実的な用法が多く見られる。このような言語事実によって，「ト」は条件文の表現というよりも時間的前後関係を表わす継起の用法なのではないかという見解もある(豊田, 1985; 鈴木, 1986; 益岡, 1993)。しかし，「ト」は条件文のプロトタイ

プ的な意味である仮定的な意味も表わすことができ(蓮沼,1987)(注4)，また，前件が動作性や意志性のない場合，事実や現実に反するような仮定性の事態や現象を叙述する反事実的条件文が認められる(寺村, 1982; 仁田, 1987)(注5)。そのため，仮定的な用法から完全には切り離すことができず，仮定的領域と事実的領域の中間的な条件文の文型だと言える。

それでは，この条件文「ト」を日本語学習者は仮定的領域と事実的領域のどちらで理解しているのだろうか。本研究は中国語母語話者と韓国語母語話者の条件文(ト，タラ，ナラ，バ)と理由文(理由カラ, 判断カラ, 前提カラ)(注6)(注7)(注8)の項目間の因果関係を重回帰分析の手法で調査し,「ト」と他の項目との因果関係から日本語学習者の「ト」の理解領域を分析する。

2. 調査方法

2.1. 被験者

被験者は日本語学習開始後 12 ヵ月目の中国語母語話者 87 名(10 名，女 77 名)と韓国語母語話者 26 名(男性 6 名, 女性 20 名)である。どちらも日本滞在経験のない外国語環境の日本語学習者である。調査地は中国西安市にある３箇所の大学と，韓国慶尚南道にある２箇所の大学で行った。両グループとも学習歴が 12 ヶ月目に達する段階で調査を行った。韓国語母語話者は，最年少の学生が 19 歳 0 カ月で，最年長の学生が 22 歳 9 カ月であり，26 名の平均年齢は 20 歳 2 カ月(標準偏差は 10 カ月)であった。中国語母語話者は, 最年少の学生が 17 歳 8 カ月で, 最年長の学生が 24 歳 1 カ月であり, 87 名の平均年齢は 20 歳 7 カ月(標準偏差は 1 歳 2 カ月)であった。

2.2. 調査方法

調査のための問題形式は，117 問(理由カラ 10，判断カラ 10，前提カラ 10，ナラ 10，タラ 10，ト 10，バ 10，その他 37)の四肢選択のペーパーテスト方式である。このテストに使用されている語彙は，国際交流基金および財団法人日本国際教育協会(2002)が編集した『日本語能力試験出題基準(改訂版)』の出題基準 4 級から 1 級の範囲で抽出されている。文法能力テスト 36 問(形態の複雑性 12，局所依存 12，構造の複雑性 12)と語彙能力テスト 48 問(和語 12，漢語 12，外来語 12，機能語 12)も併せて実施した。これらテストの合計 191 問をランダムに配置し，2 分割し， 2 回に分けて各回 90 分で調査を実施した。

2.3. 問題形式（論理文，語彙，文法）

2.3.1. 論理文テスト

論理文テストは前後関係から判断して四択から括弧の中へ正しいものを入れる問題である。例えば，「理由カラ」は「すみません，おなかが（ ），病院へ行きます」の中に「痛いから」「痛いなら」「痛ければ」「痛いのに」を，「判断カラ」は「あの人はハンサム（ ），人気がありそうです」の中に「だから」「なら」「でも」「なのに」を，「前提カラ」は「遅いよー，先に（ ），後から来てね」の中に「行くから」「行くなら」「行っても」「行くのに」を入れる形式の問題である。同様に条件文も，ナラは「花見を（ ），京都がいいですよ」の中に，「するなら」「するから」「すれば」「したら」が，タラは「このシャツが（ ），捨ててしまってもいいですよ」の中に「いらなかったら」「いらないから」「いらないとき」「いらなくても」が，バは「この薬を

（　），病気がなおるでしょう」の中には「のめば」「のんでも」「のむのに」「のむから」が，トは「あなたが（　），パーティーは楽しくないでしょう」の中に「来ないと」「来るなら」「来るとき」「来るから」のような選択肢が用意されている。

条件文の設問は１つの条件文を答えとする問題であり，４つの選択肢の中には必ずしも条件文「タラ」「ナラ」「ト」「バ」の全てを項目に入れていない。これは，条件文の問題であることを意識させないためであると共に，１つの設問で４つの条件文の間の理解度を抽出するのが目的ではなく，各 10 問ずつの正答率を他の条件文と比較することが目的であるためである。これは「理由カラ」，「判断カラ」，「前提カラ」も同じである。

加えて，条件文の中には非母語話者の日本語学習者レベルでは判別の難しい微妙な差のものもあるため，他の文型も含めた問題構成にしてある。「タラ」「バ」「ト」については，条件文としての意味を表さない非仮定的な特殊用法も存在しているため，それらは除外した。

分析にあたっては，非仮定的な用法は除外し，条件文のプロトタイプの用法である仮定的用法のみに焦点を当てた。非仮定的な用法は各条件文によって，用法間に差が大きく，仮定的用法においても「ナラ」＞「バ」＞「タラ」＞「ト」の順で仮定性の強弱が存在している(前田,2009)。

論理文テストの信頼性を，クロンバックの信頼度係数で検定した。全被験者 113 名による 107 問全体での信頼度係数は α=.853 で，非常に高い信頼性を示した。

2.3.2. 文法テストと語彙テスト

日本語の能力を測定するために，宮岡・酒井・玉岡(2011)で検証実験された，48 問からなる語彙テスト(和語，漢語，外来語，機能語の各 12 問)と，36 問からなる文法テスト(形態素変化，局所依存，構造の複雑性の各 12 問)を実施した。四者択一のテスト形式で，各問 1 点とし，語彙テストは 48 点満点，文法テストは 36 点満点である。

語彙テストは，和語の問題として，「駅までの道順は（　），口で説明するのは難しいので，地図を描きましょう」の中に「やむをえなくて」「うらやましくて」「うっとうしくて」「ややこしくて」のうちから正しいものを選択する。漢語の問題も同様の形式で，「彼は入社してまだ 3 年目だが，あっという間に（　），今は課長だ」に「上昇して」「出世して」「出張して」「上級して」の中から選択する。外来語も「ひさしぶりに運動したら，後で足がだるくなったので，自分で足を（　）」の中に「マッサージした」「レクリエーションした」「コーチした」「マスターした」の中から選択して回答する。

文法テストは，形態素変化は動詞や形容詞の変化の理解を問うものであり，例えば，「誤って花びんを壊した私を，父は（　）」の中に「責めないだった」「責めるなかった」「責めなかった」「責めなくてだった」を選択する問題である。活用の理解があれば前後文を無視してでも回答が可能である。局所依存は，２つの隣り合う単語が正しく結び付けられるかどうかの理解である。例えば，「私は昨日，（　）宿題を手伝ってもらった」の中に「兄が」「兄に」「兄を」「兄から」のような助詞を入れる問題などであり，語と語の間の関係を見ている。構造の複雑性は，全体的な文の構造が正しく理解されているかどうかを問うものである。例えば，「私は毎朝（　）起きる」の中に「早い」「早くて」「早くの」「早く」のような連用修飾を入れられるかどうかを見る。そ

れぞれの問題は各該当箇所の知識があれば回答でき，全て，一文以内で完結するように統制されている。

全被験 113 名のクロンバックの信頼度係数は，語彙テストが α=0.853，文法テストが α=0.801 で，いずれのテストも高い信頼度を示した。

3. 調査結果

3.1. 比較の妥当性の検討

中国語母語話者と韓国語母語話者の語彙テストと文法テストの得点の平均を独立したサンプルの *t* 検定で比較した結果，語彙テスト[$t(111)=0.216$, $p=.829$, *n.s.*]でも文法テスト[$t(111)=0.239$, $p=.812$, *n.s.*]でも韓国語母語話者と中国語母語話者の間に有意な違いは見られなかった。即ち，両者の日本語学習開始後１年目の文法能力と語彙能力は調査時点において差がなく，両者を直接比較することが妥当であると言える。次いで，韓国語母語話者と中国語母語話者の各項目の得点の平均値の差を一元配置の分散分析によって検証した結果，以下，表２のようになった。

表2 韓国語母語話者と中国語母語話者の各項目の得点の比較

		カラ								
		理由	判断	前提	ナラ	タラ	バ	ト	テモ	ノニ
韓国語母語話者	M	6.38	5.73	5.73	5.19	4.77	4.88	5.46	6.12	6.77
(n=26)	SD	2.04	1.87	1.99	2.35	1.27	1.97	2.21	2.03	2.12
中国語母語話者	M	6.53	5.52	2.95	3.83	4.69	7.17	6.05	5.82	5.24
(n=87)	SD	2.06	2.06	2.01	2.26	2.04	1.78	2.01	2.30	2.27
t 検定の結果				***	**		***			**

注: *p<.05. **p<.01. *** p<.001. Mは平均，SDは標準偏差を示す.

独立したサンプルの *t* 検定の結果(韓国語母語話者から中国語母語話者の得点を引く形式の分析)，表２に示したように，「前提カラ」「ナラ」「バ」「ノニ」において，韓国語母語話者と中国語母語話者の得点に有意差が見られた。「前提カラ」は，韓国語母語話者(M=5.73)の方が中国語母語話者(M=2.95)よりも 2.78 点も得点が高く，この差は有意であった[$t(111)=6.191$, $p<.001$]。また，「ナラ」についても韓国語母語話者(M=5.19)の方が中国語母語話者(M=3.83)よりも 1.36 点だけ得点が高く，この差は有意であった[$t(111)=2.679$, $p<.01$]。さらに，「ノニ」については，両グループともに得点が高いが，韓国語母語話者(M=6.77)の方が中国語母語話者(M=5.24)よりも 1.53 点だけ得点が高く，この差は有意であった[$t(111)=3.058$, $p<.01$]。ところが，「バ」については，両グループの得点が逆になり，中国語母語話者(M=7.17)の方が韓国語母語話者(M=4.88)よりも 2.29 点も得点が高く，この差は有意であった[$t(111)=-5.613$, $p<.001$]。

一方，「理由カラ」「判断カラ」「タラ」「ト」「テモ」においては韓国語母語話者と中国語母語話者の間に有意な違いが見られなかった。「理由カラ」は，韓国語母語話者(M=6.38)の得点と中国語母語話者(M=6.53)の得点は共に全体の項目の中では高く出ており，両得点間に有意差が見られなかった[$t(111)=-0.313$, $p=.755$, *n.s.*]。「判断カラ」も同様に，韓国語母語話者(M=5.73)と中国語母語話者(M=5.52)の得点に有意差が見られなかった[$t(111)=0.473$, $p=.637$, *n.s.*]。「ト」は韓国語母語話者

(M=5.46)と中国語母語話者(M=6.05)で有意差がなく[t(111)=-1.270, p=.221, *n.s.*], 「テモ」も韓国語母語話者(M=6.12)と中国語母語話者(M=5.82)で有意差が見られなかった[t(111)=-.587, p=.591, *n.s.*]。「タラ」のみは等質性を考慮した Levene の等分散性の検定の結果, F=9.02, p<.01 で有意であったために，等分散を仮定しない結果を採用した。その結果においても韓国語母語話者(M=4.77)と中国語母語話者(M=4.69)で有意差がなかった[t(66.447)=0.240, p=.811, *n.s.*]。

有意差の見られなかった「理由カラ」「判断カラ」「タラ」「ト」「テモ」の各項目のうち，「テモ」以外は順接に属する項目であった。「理由カラ」「判断カラ」は事実的領域に属した理由文であり，「タラ」「ト」は仮定的な意味に加えて，非仮定的な用法を強く有しており，非仮定的な文脈で用いられることも多く，事実的領域の側面がある。即ち，順接の事実的領域に近いものは韓国語母語話者も中国語母語話者も理解に差がなかったと言える。

有意差のあった「前提カラ」「ナラ」「バ」「ノニ」の各項目のうち，「ノニ」以外は順接の領域であり，且つ，仮定的領域に属する項目であった。「前提カラ」は事実的領域に属するが，カラの拡張した用法であり，仮定的な側面も有している(網浜,1990;斉藤,2008)。

韓国語母語話者の方が「ナラ」の得点が有意に高く，中国語母語話者の方が「バ」の得点が有意に高かったが，「バ」「ナラ」は条件文の中でも仮定的な領域に属する，仮定性の高い用法であり，これらの仮定的な用法で習熟度に差が見られたのは，１つには仮定的な論理関係を理解するのが他の理由文の確定的な論理関係や逆接の論理関係を理解するよりも困難であったためと考えられる。もう１つは母語からの影響が考えられ，従属節内にテンスの分化を持っている韓国語母語話者の方が「ナラ」をより理解しやすく，韓国語のような従属節内のテンスの分化を持たない中国語を母語とする中国語母語話者には「ナラ」は困難であり，条件文の用法のうち「バ」に偏在した理解をしたのではないかと考えられる。

3.2. 中国語母語話者の条件文「ト」の理解

中国語母語話者のデータを他の論理文の８項目（「理由カラ」「判断カラ」「前提カラ」「ナラ」「タラ」「バ」「テモ」「ノニ」）を従属変数として，条件文「ト」の得点を予測するステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果(R^2=.135, 調整済み R^2=.125), 表３に示したように,「ト」に有意な影響を与えていたのは「理由カラ」のみであった(β=.520, p<.01)。条件文の「ナラ」「タラ」「バ」は,「ト」の得点を予想する有意な説明変数とはならなかった。中国語母語話者の場合,「ト」を仮定的領域と切り離して理解しているものと思われる。

表3　中国語母語話者の条件文「ト」を予測する重回帰分析

	満点	平均	標準偏差	β	t値	
予測変数（従属変数）						
ト	10	5.91	2.06			
説明変数（独立変数）						
理由カラ	10	6.53	2.04	0.520	6.417	***

注：　n=87. * p<.05. ** p<.01. ***p<.001.

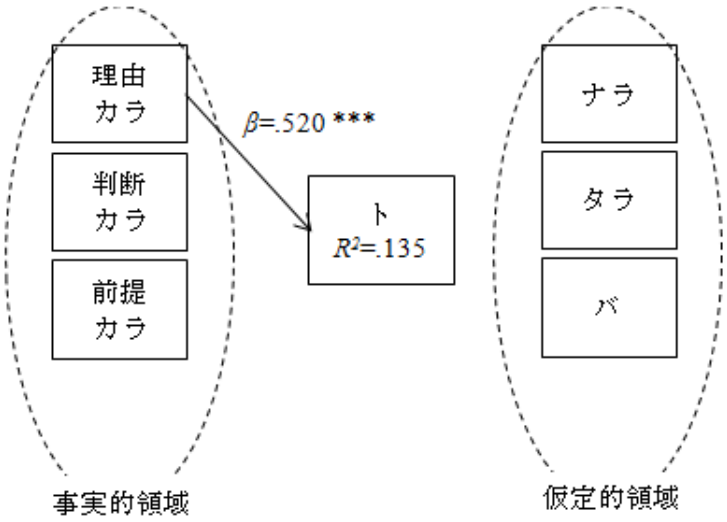

図１　中国語母語話者の「ト」の理解領域

注1: βは標準偏回帰係数を示す．R^2は決定係数を示す．

注2: *** p<001.

中国語母語とする日本語学習者の重回帰分析の結果を基に各項目間の関係をまとめて図１に示した。「理由カラ」は前件が事実的に生起し，後件へと展開する「原因—結果」の事実的な意味領域を表しており，中国語母語話者は仮定的領域よりも，事実的領域に近い意識をしていることが伺える。この結果から中国語母語話者は「ト」を仮定的領域にある条件文として理解しておらず，寧ろ，前件を事実的に捉えて，後件へ繋げる継起的な用法として理解している可能性が高いと思われる。

3.3. 韓国語母語話者の条件文「ト」の理解

韓国語母語話者のデータも中国語母語話者と同様に，論理文の８項目（「理由カラ」「判断カラ」「前提カラ」「ナラ」「タラ」「バ」「テモ」「ノニ」）を従属変数として，条件文「ト」の得点を予測するステップワイズ法による重回帰分析を行った(R^2=.515, 調整済み R^2=.473)。その結果は表４に示した通りである。「ト」の得点を有意に予測するのは「ナラ」 (β=.568, p<.001)および「判断カラ」(β=.326, p<.05)であった。「タラ」「バ」「理由カラ」「テモ」「ノニ」は，「ト」を有意に予測しなかった。

表4　韓国語母語話者の条件文「ト」を予測する重回帰分析

	満点	平均	標準偏差	β	t値	
予測変数（従属変数）						
ト	10	5.46	2.21			
説明変数（独立変数）						
ナラ	10	5.19	2.35	0.568	3.808	***
判断カラ	10	5.73	1.87	0.326	2.183	*

注：　n=26. * p<.05. ** p<.01. ***p<.001.

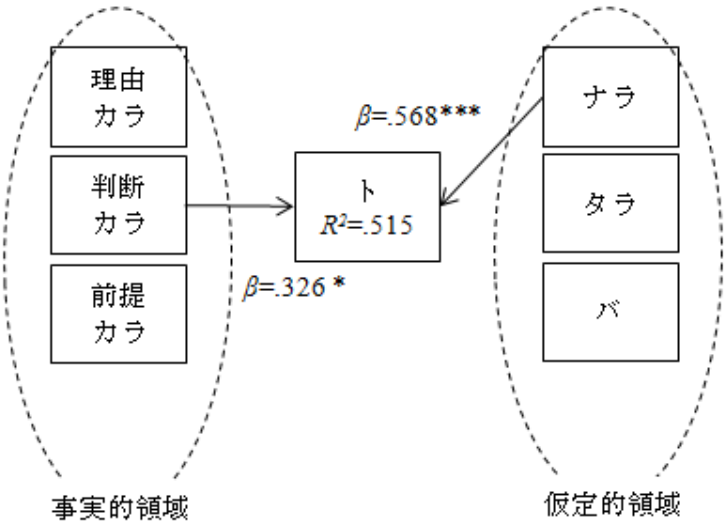

図２　韓国語母語話者の「ト」の理解領域
注1: βは標準偏回帰係数を示す．R^2は決定係数を示す．
注2: * p<.05.　*** p<.001.

韓国語母語とする日本語学習者の重回帰分析の結果を基に各項目間の関係をまとめて図２に示した。この結果は，事実的領域の中で，「原因—結果」を表す「理由カラ」よりも，より認識的な領域で「判断—根拠」を表す「判断カラ」と因果関係があり，条件文の中でも反事実的条件を表す最も仮定性の高い「ナラ」と得点の因果関係があったことからも，韓国語母語話者は「ト」を事実的領域と仮定的領域の中間で理解し，やや仮定的領域に近い理解を示したと言える。

4. 総括

「テモ」「ノニ」の逆接の論理文は表３，表４の重回帰分析でも除外されるように，「ト」の理解には影響を及ぼさない項目のようである。これは条件文と理由文の間の論理的な連続性よりも，順接と逆接の関係の方が，論理関係が明白であり，理解がしやすかったためであると考えられる。
以上の結果は「ト」が中国語母語話者の場合は，事実的領域から仮定的領域へと発達して行く可能性を示唆し，韓国語母語話者は仮定的領域から事実的領域へと発達させていく可能性を示唆した。理解過程が事実的領域からの順であるのか, 仮定的領域からの順であるのかという差はあるものの，学習者は「ト」の理解に際して，条件文の用法(仮定的領域)と継起的な用法(事実的領域)の２つの領域に分けた理解をしつつ，「ト」の習得を拡張的に進めていると考えられる。学習者にとって事実的領域と仮定的領域の双方への拡張的な意味理解が可能であるとすれば，「ト」が内含している事実的用法と仮定的用法の多義は類推可能な連続的なものであると考えられる。学習者は「ト」の多義を同時に習得するのではなく，どちらかの領域から理解し，拡張的に習得していっているものと考えられる。

＜引用文献＞

網浜信乃 (1990).「条件節と理由節—ナラとカラの対比を中心に—」『待兼山論叢日本語学編』24,9-38.

有田節子 (2006).『条件表現研究の導入　条件表現の対照』くろしお出版社.
今尾ゆき子(1990).『ノデ，カラ，タメ―その選択条件をめぐって』名古屋大学文学研究科日本言語文化専攻修士論文(未公刊).
岩崎卓(1994).「ノデ節，カラ節のテンスについて」『国語学』179,114-131.
国際交流基金・日本国際教育協会 (2002).『日本語能力試験出題基準 改訂版』国際交流基金.
小泉保 (1987).「譲歩文について」『言語研究』91,1-14.
斉藤信浩(2002).「コーパスを利用した接続助詞「から」と「ので」の文体および待遇表現に関する研究」『日本語文学』(日本語文学会)18,57-80.
斉藤信浩(2008).「因果関係を表さない接続助詞カラの習得―英語・中国語・韓国語母語話者のデータ比較を通して―」『ことばの科学』(名古屋大学言語文化研究会)21,155-170.
坂原茂 (1985).『認知科学選書 2 日常言語の推論』東京大学出版会.
白川博之(1995).「理由を表さない「カラ」」『複文の研究(上)』くろしお出版.
鈴木義和(1986).「接続助詞「と」の用法と意味」『国語論叢』13.
田中久美子(1995).「依頼場面における理由提示形式―「から」の待遇上の制約―」『言語文化と日本語教育 水谷信子先生退官記念号』(お茶の水女子大学日本言語文化学研究会)9,123-133.
趙順文(1988).「「から」と「ので」―永野説を解釈する―」『日本語学』7(7),63-75.
寺村秀夫(1982).『日本語の文法(下)』国立国語研究所.
豊田豊子(1985).「「と，ば，たら，なら」の用法の調査とその結果」『日本語教育』56,51-64.
永野賢(1951).「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会)29-2,467-488
永野賢(1988).「再説・「から」と「ので」とはどう違うか―趙順文氏への反批判をふまえて―」『日本語学』12(7),67-83.
仁田義男(1987).「条件づけとその周辺」『日本語学』6(6).
蓮沼昭子(1987).「条件文における日常的推論−「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって−」『国語学』150.
前田直子(1991).「『論理文』の体系性」『日本学報』10,29-43.
前田直子(2009).『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究―』くろしお出版.
益岡隆志(1993).『日本語の条件表現』くろしお出版.
三浦つとむ(1975).『日本語の文法』勁草書房.
宮岡弥生・酒井弘・玉岡賀津雄(2011). 「日本語語彙テストの開発と信頼性－中国語を母語とする日本語学習者によるテスト評価―」『広島経済大学研究論集,』34(1), 1-17.
ヤコブセン,W.M.(1990).「条件文における「関連性」について」『日本語学』4(9),93-108.
山田みどり(1984).「助詞の諸問題」『研究資料日本文法５助辞編(一)助詞』明治書院.

＜注＞

1) 「条件文の結果的肯定が理由文であり，その結果的否定が譲歩文である」(小泉, 1987:5)とし，条件文の論理的な結果の関連性において，理由文，条件文，譲歩文(逆条件文)を論理文と名付けている。

(a) お金があれば，幸せだ　→　　お金があるから，幸せだ　　(結果肯定)

お金があるのに，幸せじゃない　　(結果否定)

2) 因果関係を表わす複文は，理由文，条件文，逆理由文，逆条件文がある。

(b)この薬を飲めば，風邪が治ります(条件文)　　(有田, 2006:7)

(c)この薬を飲んだので，風邪が治りました(理由文)　　(有田, 2006:7)

(d)この薬を飲んでも，風邪は治りません(逆　条件文)　　(有田, 2006:7)

(e)この薬を飲んだのに，風邪が治らなかった(逆　理由文)　　(有田, 2006:7)

3) 前田(2009)では「仮定」と「仮説」という用語を使い分けている。「仮定」というのは，前件と後件が結合した際にできる１つの複文が条件文として仮定的な意味を表すときに用いており,「仮説」というのは前件か後件か１文レベルで内容が事実と対立する場合に用いている。従って，複文全体が事実的な意味を表す非仮定的な用法であっても，前件は「仮説」であり，後件は「事実」であるような組み合わせの文も存在する（例「仮説＋事実」：雨が降れば，いつもみんな俺の部屋に集まって麻雀をしたものだ（多回性・習慣））。

4) 以下のような例文が挙げられている。

(f) 手が汚いと，おやつをもらえませんよ。（前田 2009:60）

(g) 動くと，撃つぞ。（前田 2009:65）

5) 前件が状態性を表す場合や，意志性のない場合という前提が必要なため，「ト」の反事実的条件文の用法は限定的であり，反事実的条件文に懐疑的な論調もあるが(豊田,1985;)，以下のように表現が可能である。

(h)私がもっと若いと，今度のマラソン大会に参加するんだが。(寺村 1981:69)

(i)もう少し前に判ると，よかったが，ちょっと遅すぎる。（前田 2009:69)

6) カラ，ノデ，タメの類義分析に関しては多くの研究が出されているが(今尾, 1990; 趙, 1988;永野, 1952,1988; 三浦, 1978; 山田, 1984)，これらの３種類の因果関係を表わす接続助詞の明確な意味の差はなく，接続形式の違い(*だノデ，*でしょうノデ，*だろうノデ，*まいノデ)以外にはない。管見では，岩崎(1994)で従属節内の時制の違いが指摘されたのがカラ，ノデの意味分析の唯一の成果と言える。現在の意味分析では，文体・待遇表現上の違いのみが存在していることが指摘されている(久保, 1991; 斉藤, 2002; 田中, 1995)。また，拡張的なカラの用法においてもノデとの交換が可能であり，ほぼ並行的な意味を持っていると考えられている(前田, 2009)。そのため，本研究では，カラ，ノデ，タメは文体差によるものと見なし，カラのみをプロトタイプ的な日本語の理由文の代表として扱った。

7) 理由文の「ノデ」「タメ」について，本稿では「タメ」は文語表現であり，「カラ」「ノデ」の対立は丁寧・非丁寧であり，文体上の差であるという立場を取る(永野, 1988)。

8)ヤコブセン(1990)では「原因―結果」を表す「理由カラ」から，「判断―根拠」を表す「判断カラ」を経て，最終的には因果関係を表さない「前提―帰結」の「前提カラ」へと意味拡張をしていると分析している。「判断カラ」は事実的領域から仮定的領域に一歩接近した表現であり，条件文との連続性が予測される。本調査では，理由文としてこれらの３つの用法を項目として挙げて調査を行った。